

使徒の働き16章16－24節 「ピリピにおける苦しみ」

1A 霊の対決 16－18

2A 解放より束縛を選ぶ体制 19－24

1B 人より金銭を愛する者たち 19－21

2B 法より群衆を選ぶ長官ら 22－24

本文

使徒の働き 16 章を見ていきます。私たちは、パウロの一行が、マケドニア人の助けてくださいという呼びかけ、パウロの夢によって、欧州の宣教に導かれたところを見ていっています。その始まりが、ピリピにおける宣教です。

ピリピは、マケドニア、すなわち今のギリシアの北部の地域における、ローマの主要な植民都市です。そこに行ったら、祈り場あると思われた川岸に行った、とありましたね。ローマの植民都市で、ピリピの市民であることに誇りを持っている人々が集まっていたところで、ユダヤ人がほとんどいなかったことを示しています。集まって来たのも、主に女性たちです。ユダヤ人の会堂における伝道で宣教を行っていたパウロたちにとっては、これは、本当に小さな働きです。しかし、それは人間の目であり、神の召されたところにパウロたちは忠実でありました。

主は、アジアのティアティラ出身の、紫布の商人、リディアの心を開かれました。そして、彼女だけでなく、彼女とその家族がバプテスマを受けています。そして、彼女の家に行き滞在するようになります。おそらく、そこがピリピにおける教会の始まり、家の教会と言えるでしょう。

1A 霊の対決 16－18

¹⁶ さて、祈り場に行く途中のことであつた。私たちは占いの霊につかれた若い女奴隷に出会つた。この女は占いをし、主人たちに多くの利益を得させていた。

霊の対決が起こります。具体的には、「占いの霊」というのは、「ピュートーン πύθων の霊」です。ギリシアには、有名な、デルフォイのアポロン神殿があります。デルフォイの神託で有名です。王や将軍が戦争に勝つかどうか、伺いを立てたり、健康問題、投資などでも伺いを立てます。巫女が、恍惚状態になって神託を語るのです。ピュートーンはギリシア神話では蛇と考えられていました。その霊につかれていて、現実に存在していました。そして、ローマは、奴隷制度によって社会が成り立っていました。この女を奴隷にし、主人は、占いをすることで利益を得ていたのです。

¹⁷ 彼女はパウロや私たちの後について来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの

道をあなたがたに宣べ伝えています」と叫び続けた。

すでに、パウロたちの宣教において、霊の対決が起こっていました。キプロス島でのことを思い出してください。「13:6-8 島全体を巡回してパポスまで行ったところ、ある魔術師に出会った。バルイエスという名のユダヤ人で、偽預言者であった。7 この男は、地方総督セルギウス・パウルスのもとにいた。この総督は賢明な人で、バルナバとサウロを招いて神のことばを聞きたいと願った。8 ところが、その魔術師エリマ(その名を訳すと、魔術師)は、二人に反対して総督を信仰から遠ざけようとした。」このように福音宣教に対して、魔術であるとか、ここではピュートーンの霊であるとか、妨げようとするものがあるのです。

そもそもこれは、神の国の福音に対して、ずっと現れてきた悪の勢力です。モーセによって、主は、ファラオに対して、わたしの民を去らせなさいと命じられました。その時、ファラオは頑なに拒みました。そのそばにいたのが、魔術師です。アロンの杖が蛇になりましたが、魔術師も杖を蛇にしました。ナイル川を血に変えましたが、彼らも同じことをしました。そして、ファラオはモーセとアロンの言うことを聞き入れませんでした。

そして、預言者エリヤが、450 人のバアルの預言者、400 人のアシェラの預言者と対決したこともありましたが、たった一人で、水浸しになった祭壇を、祈りによって天から火を降らせたのです。

そして、国々の動きに、「君」と呼ばれて、イスラエルの国に対して挑みかかっている姿も出てきます。ダニエル 10 章を見れば、イエスご自身ではないかと思われる主の使いが、ダニエルのところに行くのを、ペルシアの君が阻んでいたという言葉があります。そして、ギリシアの君も立ち上がるとし、それで、ギリシアの王たちが戦い、荒らす忌まわしい者がその中で現れ、ユダヤ人の残りの者たちを滅ぼそうとし、それが終わりの日の世界を荒らす者、反キリストを示していました。

そして、その長い歴史が、壮大な歴史の中で、キリストを取り巻いて起こっていることを示したのが、黙示録 12 章です。獣にすべての力、権威、位を与える悪魔が、赤い竜として登場します。そして、12 の星を手を持つ女が出てきます。イスラエルです。そして、その女が男の子を産もうとすると、竜がそれを食べてしまおうとします。それが、ヘロデ大王が、ベツレヘムにキリストが生まれると、東方の博士から聞いて、二歳以下の男の子たちを虐殺するという悲劇が起こります。そして、女は、ひと時、二時、半時の間、荒野に逃れます。それが、イエスが弟子たちにオリーブ山で前もって伝えらえた、荒らす忌まわしい者が聖所に入って、自ら神と宣言する時です。これまでにない苦難に、イスラエルの残りの者たちが遭いますが、主が戻ってこられて救われます。

そういった、霊の勢力が神の国に対して、戦いを挑んでいるということを知ることは大切です。福音書には、主が御国の福音を語るや否や、あらゆるところで悪霊につかれた人々が出てきます。

そして、主が追い出され、悪霊から解放される人々の証しが出てきます。そこには激しい戦いがあることを、主は明かされます。「マタ 11:12 バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。」神の国が、サタンの支配する領域に激しく入り込んでいるのです。

そして、もちろん、主が捕らえられる時に、「ルカ 22:53 しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です。」と言われました。ところが、それは神のご計画の大どんでん返しで、その十字架刑こそが、人々を悪魔の支配から奪還するための始まりであり、よみがえりによって、それら諸々の霊は、キリストを将軍とする凱旋に、見世物となって引かれていくことになります(コロサイ 2:14)。

ということで、私たちにも福音宣教というものが、霊の対決が含む中での働きなのだとすることに留意しなければならないでしょう。

ところで、この、ピュートーンの霊につかれた女は、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えています」と叫び続けています。これは、事実そうなのです。ここで大事なことは、悪霊のすることは、ただ嘘をいうこと、中傷することで反対するだけではない、ということです。ヤコブの手紙には、悪霊どもも、神は唯一だと信じていて、「身震いしています(2:19)」とあるとおり、神を知らないわけではないのです。

いや、私たちが目に見えない世界が分からないのに対して、悪霊どものほうが知っているので、それを対決する時に明かすことがあります。イエスが、カペナウムの会堂で教えておられた時に、汚れた霊に付かれた人が叫びました。「マル 1:24 ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」神の聖者、あるいは神の子です。人であるのに、実は、神である方であることを明かしたのです。主はその時は、はっきりと「黙れ」と言われて、この人から追い出されたのです。

ここでも、ピュートーンの霊も、パウロたちのことについて、本当のことを言っている、実は、そのことによってかえって、自分たちの次元に引き落とそうとしています。分かりやすく言えば、ほめ殺しでしょうか。持ち上げておいて、それで悪霊どもの次元にかえって、神の聖霊の働きを引き落とし、実は、福音宣教を邪魔しているのです。

¹⁸ 何日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り向いてその霊に、「イエス・キリストの名によっておまえに命じる。この女から出て行け」と言った。すると、ただちに霊は出て行った。

イエス・キリストの名には、大きな力があります。権威があります。ペテロとヨハネが、足なえの男に言ったとおりです。「3:6 金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・

キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」と言いました。私たちにその力があるのではありません。イエスが地上で宣教を行われて、力と権威を示されたように、その御名によって、この方を信じる者であれば、悪霊を制する力が与えられているのです。

この恵みにしっかりと立つことが、霊の対決では必須です。というのは、霊の対決において、悪魔は、あることないこと、私たちがどんなに罪深いか、どんなにひどい人間かを、言い立てることもあるからです。悪霊を追い出す人々は、それゆえ、自分がへりくだり、主の前で罪も告白します。それは、自分が清くならなければ力が与えられないからではありません。悪霊に、そしる機会を失わせるためです。悪霊は何とかして、私たちが何かを言うことをいって、イエスの御名による力を行使することのないように仕向けます。しかし、私たちはそれを退けて、御名によって立ち向かいます。ちょうど、ダビデがゴリヤテに対して、ゴリヤテがダビデをさげすみましたが、「私は、生ける神の御名によって立ち向かう」と言った通りです。

2A 解放より束縛を選ぶ体制 19-24

1B 人より金銭を愛する者たち 19-21

¹⁹ 彼女の主人たちは、金儲けする望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕らえ、広場の役人たちのところに引き立てて行った。

女奴隷は、解放されました。これは、まさに福音です。サタンの力、暗闇の力から解放されて、愛する御子の支配下に置かれました。しかし、それを喜ばないのは、彼女で金儲けをしていた主人たちです。それで、パウロとシラスを捕えて、役人たちのところに引き立てていきます。

同じようなことが、福音書でも起こりましたね。そう、レギオンの追い出しです。レギオンは、ローマ軍団を、元々示しており、5-6 千人の単位でした。ですから、悪霊どもがそれだけたくさん、一人の男に棲んでいたのです。その男から、主はレギオンを追い出されました。「マルコ 5:15 悪霊につかれていた人、すなわち、レギオンを宿していた人が服を着て、正気に返って座っている」とあります。この男は福音によって解放されたのです。そして彼は、お供させてほしいとイエスに言います。回心したのです。

けれども、このことを喜ばずに、豚二千匹ほどにレギオンがとりついて、ガリラヤ湖の中になだれ込んで死んだので、豚によって商売していた者たちが恐ろしくなって、イエスにここから出て行ってほしいと願いました。一人の男が正気に戻ったことを喜ぶのではなく、かえって恐ろしくなり、出て行ってくれと言っています。これと同じことが起こっています。この主人たちは、自分たちの儲けがなくなったので、一人の女が解放されたのを喜ぶことよりも、パウロとシラスを捕らえたのです。

そして、場所が「**広場**」とあります。広場とはアゴラとも呼ばれるところで、行政的な手続きをとる

アゴラもあれば、商店が多く立ち並ぶ広場もあります。ピリピは、商業的な広場であり、かつ裁き司の裁判席、ビーマと呼ばれますが、それが広場の前にありました。今もその跡が残っています。そのすぐ後ろには、エグナティア街道が走っており、人々が行き交います。

²⁰ そして、二人を長官たちの前に引き出して言った。「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し、²¹ ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」

主人たちは、ローマの長官たちに訴えたのは二つです。いわゆる騒擾罪であり、騒ぎを起こして、秩序を乱しているということです。もう一つが、ユダヤ人であるということです。ユダヤ人が、ローマ人のもっている多神教の宗教、また習慣を変えようとしている、異邦人をユダヤ教に改宗しようとしているという訴えです。植民都市ピリピにおいて、誇り高きローマの宗教や慣習に挑みかかっていると訴えているのです。反ユダヤ感情は、確かにローマにありました。コリントにおいても、ユダヤ人であるアキラとプリスキラがローマからコリントにやってきたのは、皇帝クラウディスが、ローマからユダヤ人を退去させるように命じていたからです(18:2)。

ここに、ピリピ人への手紙の背景があります。ローマの市民であることに誇りを持っていたピリピにいた信者たちに対して、「3:20 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。」とパウロは励ましました。天に国籍があるというのは、私たち日本人クリスチャンが間違えてしまいそうなのは、死んだ後、行ける何か良いところ、という意識です。極楽浄土みたいなところに考えます。いいえ、この言葉をピリピ人が聞けば、それは、「あなたがたは、ピリピの人々がローマを誇りとして、その市民権に忠誠を誓っている以上に、天を誇りとし、十字架を誇りとし、神の国の市民であることに忠誠を誓いなさい」という意味合いなのです。

神の福音に生きるとは、この地上の人々が大切に思っているところに、敢えて立ち入って、それでいて、イエスが主であることを証しするのです。例えば、日本であれば、檀家制度があります。私の家には先祖の墓があるから、キリスト者になることは難しいと言う思いがあります。しかし、私たちは敢えて、水のバプテスマを受けて、神の家族の人々に証人になってもらい、それがイエスと共に墓に入ることで、またイエスと共によみがえったことを証しするのです。すでに古い自分は墓に葬られ、キリストにあって新しい人にされたのです。そして神の家族に入ったのです。天に入るとは、忠誠をどちらに誓っているか？ということでもあります。

2B 法より群衆を選ぶ長官ら 22-24

²² 群衆も二人に反対して立ったので、長官たちは、彼らの衣をはぎ取ってむちで打つように命じた。

長官たちは、かつて総督ピラトが犯した過ちを犯しました。群衆の圧力に押されて、正しい裁判をせずに、そのままむち打ちにしました。どれほど酷いものであったかは明らかではありませんが、パウロは、宣教の働きの中で三度、むち打ちを経験しています(Ⅱコリ 11:25)。

そして、大事なのがここが、広場の前だということです。私も、ピリピの遺跡を訪問した時、長官たちが裁いた跡、ビーマの跡があるので、そこに立ちました。後ろには、かなり広い、アゴラがあります。そこで群衆が見ている前で、衆人の目にさらされて、パウロとシラスがむち打ちにされました。これは、ただ痛み苦しむだけでなく、非常に恥さらしになるのです。パウロがなぜ、福音について、私はそれを恥と思わないと言ったのかは、ここに由来します。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」信じる人すべてに、救いをもたらす神の力なのですから、このような恥を忍ぶのです。

²³ そして何度もむちで打たせてから二人を牢に入れ、看守に厳重に見張るように命じた。²⁴ この命令を受けた看守は、二人を奥の牢に入れ、足には木の足かせをはめた。

厳重な監視の中に置きます。奥の牢とありますから、窓もありません。しかも、足枷をはめています。汚物はそのまま垂れ流しです。今も、ピリピの遺跡には、そのビーマの跡もありますし、牢獄の跡もあります。牢獄は、実に陰鬱な狭いところで、暗闇でした。最悪の状況です。

どれだけの辱めで苦しみであったか、次の宣教の町、テサロニケ人の人たちにも話しました。「Ⅰテサ 2:2 それどころか、ご存じのように、私たちは先にピリピで苦しみにあい、辱めを受けていたのですが、私たちの神によって勇気づけられて、激しい苦闘のうちにも神の福音をあなたがたに語りました。」そしてピリピ書でも、こう明かしています。「1:29-30 あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。30 かつて私について見て、今また私について聞いているのと同じ苦闘を、あなたがたは経験しているのです。」

どうでしょうか？私たちの主は、義のために迫害される者は幸いですと言われました。福音のために生きると、かえって悪いことが起こります。ヨセフも、神を恐れて、主人の妻の言い寄りから逃げたことによって監獄に入れられました。義のために、悪いことが起こるのです。今、カトリックの宣教師たちが長崎に来た記録を読んでいます。よりによって、病にかかったり、騒動が起こり、現地では、「キリストの神はたたりをもたらす」という、そしりを受けていたことが書かれています。

しかしそこで踏ん張ります。パウロとシラスも、その最悪の状況の中で、賛美と祈りによって夜を過ごしていました。これは、霊の戦いです。私たちが、主にあって堅く立つ時に、主はその中で勝利者として力を現わしてください。